



a man with NO mission ④

- 3 1 階段落ち (1044字)
- 3 2 箱 (231字)
- 3 3 ペットボトルの蓋 (1504字)
- 3 4 陳列棚 (2149字)
- 3 5 心に残る作品 (556字)
- 3 6 行方不明 (540字)
- 3 7 失敗三 (633字)
- 3 8 拉致 (アブダクション) (1091字)
- 3 9 更地 (584字)
- 4 0 遊園地 (1111字)

イラスト・いぬ36号

31 階段落ち

31 階段落ち

男は下り階段の最初の段で足を踏み外し、前のめりになって転げ落ちはじめた。三階から一階へとぶち抜きで続く、デパート正面の豪華な長い階段だった。

一度転がり出したが最後、途中でとまることはできなかった。男は階段の角に体中を打ちつけながら速度を上げて転がり落ちていった。

無傷で済むはずがなかった。まず最初に頬骨が折れた。すぐあとに左肘の関節が砕け、続けて右足の脛が折れた。

踏ん張ろうとしたせいで余計に弾みがつき、少し浮き上がったあと腰骨を強く打ちつけた。体の中でそれがひび割れる音が響いた。

指の骨も何本か駄目になった。実際に何本折れたか、転がりながら数えることはできなかった。そうこうしているうちにも、頭蓋骨が陥没し、膝のお皿が真っ二つに割れた。

階段はまだ半分残っていた。不幸中の幸いは、痛みを感じる暇もなかったということだった。無事なところは全身のどこにもなかった。

男はちょっと足を滑らせたくらいで情けないと心のどこかで己を笑う余裕があったが、首がありえない方向にねじれて自分の背中が見えるようになるといよいよそうも言ってもらえなくなった。

それに、こんなにやかましい音を立てて落ちていたらみんなの注目の的にもなってしまふ。男は晒し者にはなりたくなかった。

その心配には及ばなかった。

男は下から五段目で大きく跳ねると、弧を描くようにして宙を舞い、頭のとっぺんから一階フロアに着地した。

着地の衝撃が頭から胴体を伝って、最後に足先がぷるぷると震えた。男の意識はその衝撃波のうちにかき消えたのだった。

頭で倒立した男の体は、体操選手のようにその状態で一瞬静止し、客や販売員などその場に居合わせた人々がはっと息を飲んだあとゆっくり傾いていった。

誰も一步も動けなかった。男の体は根元から折れた塔のように横ざまに倒れ、フロア中に大きな音を響かせた。

一拍おいて、人々が一斉に男を取り囲んだが、誰もその傷だらけの体に触れようとするものはいなかった。

どこからともなくデパートの支配人が現れ、輪の中心に割って入った。

「お買い物中のみなさま、大変お騒がせしております。はっはっは、ときどきあるんですよ。ドジなお客様がいらっしゃいましてね。あとはこちらで対処いたしますので、みなさま、引き続きお買い物をお楽しみください」

支配人がぱちんと指を鳴らすと、脇からディスプレイ用の大きな布を持った販売員が二人現れた。販売員たちは、その大きな布をすっぽりと男に被せた。

人々は散り散りになって買い物に戻っていった。デパートに平和が戻った。

32 箱

男は前に進もうとした。何か見えない壁に阻まれて一步も前に行けなかった。

右に行こうとしても左に行こうとしても、見えない壁が立ちはだかっていた。

来た道に戻ろうと後ろに下がった。いつの間にか後ろも行き止まりになっていた。

考えあぐねた末、男はその場で軽くジャンプしてみた。見えない天井があって頭をぶつけた。

いつの間にか狭い箱のような空間に閉じ込められていたのだった。足元を探ってみたが、どんな抜け道もなかった。

あとは死を待つだけだった。もう死んでいるのかもしれない。

33 ペットボトルの蓋

33 ペットボトルの蓋

男はペットボトルの蓋が落ちているのを見つけると後先考えずに拾う癖があった。拾った蓋は家に持ち帰って集めていた。

なぜと訊かれても答えようがなかった。しいて言えば何かに使えそうな気がするからだったが、その「何か」とは何なのか、分かっているわけではなかった。

男は蓋を拾うと決まって上着のポケットにしまい込んだ。一つ増えるたびに、布地の上からぽんと叩いては感触を確かめた。一日に五つ以上拾うと何かいいことが起きるような予感がするのだった。

「蓋です。ペットボトルの蓋。キャップと言ったりもしますね。今日はもう四つも拾いました」

男は頼まれもしないのにその日の成果を報告することがあった。

一日がかりで出かけたのに一つも見つけれないときには、がっくりと落ち込んだ。そんなときは、せめて一つを見つけるまでと夜遅くまで近所を蟻のように歩き回るのだった。

当然のごとく、男の部屋はペットボトルの蓋で溢れることとなった。あるとき、男はうず高く積み上げられた蓋を見てひらめいた。

この蓋で家を作ろう。

男はさっそく仕事に取りかかった。ペットボトルの蓋は今やただの蓋ではなかった。それは大きな仕事を成し遂げるために必要な部品だった。

男は今まで以上に真剣に蓋集めに精を出した。集めた蓋はきちんと水洗いし、色ごとに分けてかごに納めた。

休日になると、近くの広場で時間を忘れて家作りに取り組んだ。設計図は書かなかったが、頭の中には完成したときのイメージがはっきりとあった。

男はあくまで蓋だけで作ることにこだわった。タイル貼りのように、モルタルの下地にペットボトルの蓋を押しつけていくというやり方は邪道に思えた。

男のやり方は、蓋に錐で穴を開け、ワイヤーを通して繋ぎ合わせていくというものだった。どうしても必要な箇所でのみ接着剤を使った。

蓋に穴を開けていくのは途方もなく手間のかかる作業だったが、男は幼い頃に熱中したパズルのように蓋を使った家作りに熱中した。

三ヶ月後、ようやく家が完成した。

一般の住宅よりは一回り小さいが、人が中で過ごすのに十分な大きさのある二階建ての家ができあがった。

家具やベッドも家と一体化するようにして作ってあった。制作途中から自ら住むことを考えるようになり、臨機応変に形を変えていったのだ。

男は一階と二階を行ったり来たりし、表に出て外観をとっくり眺めたりしながら、この家に移り住む決心を固めた。

その夜、関東地方にその年はじめてとなる超大型の台風が上陸した。

男は完成した家を木にくくりつけるために慌てて広場に向かった。一足遅かった。家は男の目の前で強烈な風に吹き飛ばされた。

ペットボトルの蓋でできた家は軽く、家の形のまま空高くに巻きあげられた。追い打ちとなる強風が吹きつけると、家は近隣の高層マンションの壁にぶつかって空中で分解した。

ワイヤーがちぎれ、ばらばらになったペットボトルの蓋は、むなしく風にさらわれていった。

あっという間の出来事だった。嵐はますます強まり、男は広場にある子供用の遊具の中に避難した。

一夜明け、男は重い体を引きずるようにして遊具から出た。風はすっかり収まっていた。家を作る夢はまだあきらめてなかったが、一からやり直しかと思うと気が遠くなる思いだった。

ふと見ると、広場のあちこちにペットボトルの蓋が落ちていた。家を作るのに使ったのは別物だった。強風でどこからともなく飛ばされてきたのだ。

男は気落ちしながらも一つ、また一つと拾ってはポケットにしまっていた。上着のポケットはすぐに右も左もいっぱいになった。

近くの通りに出てみると、蓋はまだいくらでも落ちていた。男はポケットをぽんと叩き、思わず顔をほころばせた。

34 陳列棚

34 陳列棚

道を歩いていると、通りの反対側にドラッグストアがあった。男はその店の軒先に出ている商品の陳列が一箇所、棚ごと大きくずれていることに気がついた。

その陳列棚は高いところに洗剤や何かがこんもり山積みになっていて、子供の上に倒れでもしたら大変なことになりそうだった。

男は車が途切れたのを見計らって通りを渡り、小走りで店に向かった。

網かごが三段重ねになったキャスター付きのラックだった。

一番上のかごに入っていたのは袋タイプの詰め替え用液体洗剤で、容量が1キロ近くあった。中段はスナック菓子、下段には徳用の使い捨てカイロが入っていた。

どう見てもバランスが悪く、中身を入れ換えた方がよさそうだった。

幸い、ラックはかごと引き出せるタイプだった。男は辺りに誰もいないことを見てとると、ささっとやってしまうことにした。

まず一番上の液体洗剤のかごを取り出し、いったん地面によけた。次に、一番軽いスナック菓子のかごを中段から取り出して上段に移動した。

あとは下段の使い捨てカイロを中段に移動し、洗剤を下段に入れるだけだった。そうすれば下に行くにしたがって順に重くなり、ずっと安定する。

「ちょっと」顔を覗かせた店員が男の行為を見咎めて声をかけてきた。「あんた、何してんの」

「あの、これ、ちょっと入れ換えようと思って……」男はちょうど引き出したスナック菓子のかごを抱え持ったままどぎまぎして言った。

「は？　なんで？」店員は不審そうに言いながら外に出てきた。

「ずれてたので」

「ずれてた」店員はおうむ返しに言った。

「それで道路渡って」男は自分が来た方向を手振り以示した。

店員はそちらをちらりと振り返り、改めて男に問い詰めるような眼差しを向けた。

「ずれてたから、危ないと思って」男は詳しく説明する必要を感じて言った。

「ずれてたって何が」

「こいつです」

男はちょうど手がふさがっていたので、つま先で陳列棚をちよんとつついた。それからすぐにその言い方は失礼だと気がつき、抱え持っていたかごと棚を示して言い直した。

「これです」

幸いと言うべきか、その陳列棚はまだはみ出したままの状態になっていた。店員は、それが元からずれていたのか、男が故意にずらしたのか、見極めるようにして棚と男を交互に見た。

「ぼくじゃないですよ」

男は疑われていると感じ、あわてて否定した。

店員はぼんやりうなずいたものの、あまり信じている様子はなかった。

「倒れたりしたら、子供とか」

「子供なんかいませんよ」店員は冷やかに言った。

「いや、もしいたら……」言いかけて、男は自分が抱え持っているものにふと目を落とした。

それは店の商品だった。よく見れば、男の好きなポテトチップスのコンソメ味だ。液体洗剤の入ったかごもまだ地面に置きっぱなしになっていた。これでは物盗りのように思われても仕方なかった。

「違いますよ。違います」男は釈明した。

「何が」

「これは、上が重いと思って。倒れたら子供とか危ないし……」

「いないんで、子供」店員は強い口調になってさえぎった。

「そうなんですけど……」男はごによごによと言った。

「勝手に入れ替えられたら困るんですけどね」店員は男にまともな理由がないのを見て取ると、わざとらしく口調を変えて詰め寄ってきた。「警察呼びますか」

「あの、いえ、すいません」

男はおとなしく非を認めた。棚がずれていたことはともかく、中身を勝手に入れ換えようとしたのは間違いだった。自分は店のスタッフでも何でもないのだ。

「元に戻しますか？」男は下手に出て言った。

店員は、言われなきゃ分からないのかよとでも言うように、これ見よがしなため息をついた。

それでもなお、男は己の気がかりを振り払えなかった。

「でも、子供とか……」

「いねえんだよ」

「やります」

男はすごすごと引き下がり、かごを元通りに戻した。

上段が液体洗剤、中段がポテトチップス、下段が徳用の使い捨てカイロ。どう考えてもバランスが悪かったが、もうどうしようもなかった。

店員に見張られながら、男はまるで使えないバイトになったような気分で棚を壁沿いに納めた。

少なくとも棚がずれているのを直したことだけは自分の手柄だった。男はほんの少しだけ自尊心を回復して店員を見た。心のどこかで一言礼を言ってもらえるものと期待していた。

「ストッパー」店員は不機嫌そうに言った。

「え？」男は何のことか分からなかった。

店員はむすっとしたまま棚の足元を指さした。

それでようやくキャスターの部分にストッパーがついていることに気がついた。それを効かせれば棚は動かなくなるのだ。

男は言われるままにストッパーを踏み込んだ。キャスターがしっかりとロックされる手応えがあった。

もともと棚がずれたのは店の人がこれをやり忘れたからだと気がつき、男は同意を得ようとして今一度店員を見た。

だが、店員は男が規律を乱す不届き者と決めてかかるような目で男を見ていた。

男は自分の発見を共有したかったが、何を言っても無駄だろうと出かかった言葉を飲み

込んだ。そろそろ立ち去る頃合いだった。

男はぎこちなく頭を下げると、もと来た道に戻っていった。

通りを横断するときちらりと振り返ると、店員はまだじっとこちらを見ていた。ドラッグストアが完全に視界の外に消えるまで、男は店員の視線を感じ続けた。

35 心に残る作品

若い頃、男はある映画を見た。とてもつまらなかった。最後まで見ても褒めるところが一つも見つからないくらい、ひどい出来映えだった。

あまりのひどさに、その後数日間その映画のことばかり考えてしまうほどだった。いくつかの具体的なシーンが思い出されると、あそこは特につまらなかったとため息が漏れた。タイトルを口にするだけで活力が奪い取られるような気さえした。

一年経っても二年経っても、男は何かにつけてその映画のことを思い出した。五年十年経っても忘れられなかった。

思い出す頻度の多さから、ときどきむしろあの映画は面白かったのではないかと疑問が生じるほどだった。男はそのたびに自分の中で再点検して、そんなことはないと改めて結論を下した。あれはただただどうしようもない、金を返せと言いたくなるようなひどい映画だった。

定期検診で病気が見つかった。精密検査のあと、医者に余命三ヶ月と宣告された。その宣告を聞いている間、男はなぜかあのつまらない映画のことを思い出していた。あそこまでひどい代物はそれまでもそれからも他に見たことがなかった。

病床で男は毎日のように昔見たその映画のことを思い出した。男にとって、それだけが唯一はっきりと思い出せる人生の記憶だった。今際の際に、男は看護師に最期の言葉を残した。

「もう一回あの映画を見たかったな」

36 行方不明

男の遺体が行方不明になった。棺から消えたのだ。

調べてみると棺の底に穴が開いていた。誰かが男はそこから逃げたのだと言った。別の誰かが死んでいるのにどうやってと反論した。確かに一理ありそうだった。遺体が盗まれた可能性もあったが、誰が何のためにと考えると皆目見当もつかなかった。

よくよく話し合ってみると、誰も男が死ぬところを見ていないことが分かった。死因も伝えられていなかった。来たときにはすでに棺に蓋がされた状態で安置されていたので、実際に遺体を見た者もいなかった。

葬儀の予約はいったんキャンセルされた。協議の結果、キャンセル料は当事者である男のもとに請求されることとなった。

騒ぎをよそに男はぴんぴんしていた。葬儀のことなど何も知らずにドーナツを食べに出掛けていた。電話を取ると葬儀社からだった。担当者は当日キャンセルなので100%支払うか、予定通り葬儀を行うかだと迫った。

男は葬儀を行うことを選んだ。今月は皿洗いのバイトで皿割りの新記録を達成していた。もうやっていけないという気持ちだった。男は自ら棺に入り、内側から自分で釘を打ちつけた。

いったん帰ってしまった人々が戻ってきて、男が釘を打つ音に合わせて踊り出した。宴会がはじまった。棺は特別強力な炎で燃やされた。すべてが灰になった。

37 失敗三

男が趣味で小説を書いていることを知ると、女は強い興味を示して読みたいと言った。男は最初渋ったが、しつこく言われるとやがて根負けした。翌日、さっそく原稿用紙で百枚ほどの長さの小説を渡した。読んで感心してほしいと思っている部分もなくはなかった。

次の週末に会ったとき、男は小説の感想を求めた。女は「まだ読めてなくて」と軽くかわした。あんなに読みたいと言ったくせにと思ったが、男は不満は口にしなかった。

その次に会ったとき、女は男が何を言うより前に「ごめん、時間なくてまだ読めてない」と多忙ぶりをアピールしながら言った。男はいつでもいいよと余裕を見せた。

しばらく間が空いて数週間ぶりに会ったとき、女はどこか小説の話題を避けるようなところがあった。男はあえて自分からは訊かないことにした。二人は忙しさを理由に会う頻度が減っていき、そのまま自然消滅した。

数年後、男は街中で女とばったり再会した。女は元気そうだった。簡単に近況報告をしあったあと、男はあ那时的小説はどうしたかと尋ねた。女はあれねと苦笑いして言った。

「なんか思ってたのと違った」

やはり読んでいたのだ。女はさらに何か批判めいたことを口にしかけたが、すぐに言葉を引っ込めて次のように言うに留めた。

「小説のこととかよく知らないから」

男はなぜあ那时的すぐに読んだことを言わないのかと問い詰めたかった。自分たちが疎遠になったのは、あの小説のせいだったというのか。

薄々分かっていたことだった。女はじゃと軽く手を振り去っていった。

38 拉致（アブダクション）

38 拉致（アブダクション）

深夜のことだった。部屋の窓から突然まばゆいばかりの光が差し込み、男は眠りを妨げられた。何事かと起き上がるとベッドの脇に影が立っていた。それは怪しげにゆらゆらと揺れ、こちらを見定めるようにしていた。

影にわっと襲いかかれた次の瞬間、男は何もない真っ白な空間に連れていかれていた。光源もないのに隅々まで煌々と明るい場所だった。すべてが白く、壁や天井の境目も分からなかった。

自分がどこにいるのか見当もつかなかった。台の上に寝かされた男は、縛りつけられているわけでもないのに身動きが取れなかった。強力な磁石で台に張りつけにされているかのようだった。

さらわれたのだという答えにたどり着くのに時間はかからなかった。一体誰がそんなことをと考えると、男の脳裏に受け入れがたい考えが浮かんだ。宇宙人だ。宇宙人にさらわれたのだ――。

ふいに目の前の空間が裂け、そこから浮き上がるようにして影が現れた。一つではなかった。いくつもの影が立て続けに現れ、男をぐるりと取り囲んだ。

輪郭のぼやけたその存在は、はっきり見ようとしても焦点を合わせることができなかった。影たちが代わる代わる揺らめく様子は、まるで何事か相談をしているかのようだった。

男は俎上の鯉のような気分だった。このまま生きて帰れないのではないかという恐ろしい考えが頭をよぎった。

そのとき、影たちの輪郭のない体から触手のようなものが生え、うねうねと伸びはじめた。

「何をするつもりだ！」

男は恐怖にひきつった声で言った。影たちは何も答えなかった。否応なく、人体実験という言葉が思い浮かんだ。

触手はそれ自体が別の生き物のような動きをして、時が満ちるのを待つかのように宙をのたくった。男はなんとか逃げ出そうとしたが、体をわずかに浮かせることさえできなかった。

「やめ、やめろっ」

聞き届けられるはずもなかった。触手が一斉に男に襲いかかった。何本もの触手が寝間着の隙間という隙間から入り込み、そして一一、一斉に男の体をくすぐりはじめた。

「……ひゃ、ひ、あひゃ、ひへへへへ、や、やめっ、やめれへへへへ、あひゃひゃ、うひっ、やめっ、やめてやめて、むりむり、ひ、いひ、うひゃひゃひゃー」

男はさっき逃げようとしたときよりもずっと本気で身をよじって脱出しようとした。無理だった。やめてくださいもう無理です死んでしまいます。懇願したが、影たちはやめなかった。

「むりむり、やめっ、いひっ、あひゃひゃひゃ、むぐっ、んぶっ、えへれへれへれ、えへへへれ、ひひ、ひっ、もうやめ、んひっ、ちょっ、げへげへへへ、あへあへひへはへー」

男の狂ったような笑い声が、真っ白な空間にいつまでも響いた。

39 更地

男は更地を見つけるたびに写真を撮った。地面以外に何も写っていない、殺風景な写真だ。撮るたびにSNSにアップしたが、反響はほとんどえられなかった。

更地は少し自転車でうろつくだけで簡単に見つかった。駅前まで行って帰ってくるだけで三つも四つも新たに見つけてしまうようなこともあった。

ときどき、慣れた道に突如として更地が出現することがあった。そういうとき、男は立ち止まってそこに何が建っていたのか考えてみるのだった。一度として分かった試しはなかった。

更地だった場所にいきなり住宅やマンションが出現するということもあった。建設中のところを見た覚えもないのに、いつの間にか完成した状態で建っているのだ。

SNSを通して、ぽつぽつと更地の情報が寄せられるようになった。男は時間を見つけては近い場所から順に足を運んだが、一週間でも間が空くとそこにはすでに新しい建物が建っているのだった。

ある日、男の家の隣が更地になっていた。取り壊し工事にはまったく気がつかなかった。毎日のように目にしていたはずなのに、どんな建物が建っていたのかも思い出せないのだ。男はいそいそとその更地を写真に撮り、仕事に出掛けた。

その日は遅くまで残業だった。夜更けに帰宅すると、隣に新しい家が建っていた。朝には更地だったその場所にだ。

男は奇妙な思いにとらわれながら家に戻ろうとした。男の家があったところは更地になっていた。

40 遊園地

男が一人で遊園地に来たときのことだった。

子供たちに風船を配っていた園のマスコットの着ぐるみが、男に気づいて手招きをした。自分にもくれるのかと思って近づくと、男は待ってましたとばかりに殴り倒された。びっくりして起き上がると、着ぐるみは向こうの方で風船をねだる子供たちに囲まれていた。

男がベンチでポップコーンを食べながら次にどのアトラクションに乗ろうか考えていると、ふいに影が差した。先ほどの着ぐるみが、隣に立ってこちらを覗き込んでいた。何か用かと訊こうとすると、着ぐるみはポップコーンの容器を持つ男の手を下からぐいと押し上げた。男はポップコーンを顔面に浴びてベンチもろとも後ろ向きに倒れた。あわてて起き上がると、着ぐるみは向こうの方で風船をねだる子供たちに囲まれていた。

ジェットコースターに乗ったときのことだった。コースターがじわじわと急な坂をのぼり、男が安全バーにしがみついていると、眼下にあの着ぐるみがいるのが目についた。着ぐるみは何かきらりと光るものを男にかざして見せた。安全バーを固定するネジだった。男はまさかと思って安全バーをがたがた揺らしてみた。それは簡単に外れてしまった。

何度もきりもみ回転するジェットコースターだった。男は振り落とされないように必死でシートにしがみついた。泣きながら止めてくれと叫んでいると、眼下に着ぐるみが若い女の子たちと一緒に写真を撮っている姿が目に入った。

気を取り直してゴーカートに乗った。園の外周沿いに走る全長一キロほどのコースだった。快調に飛ばしていると、後ろから煽ってくる車がいた。例の着ぐるみだった。逃げようとしたがダメだった。着ぐるみは男を煽っては後ろからわざと追突してきた。

ふいに着ぐるみが車をぴたりと横につけてきた。横目に見ると、着ぐるみはまるで謝罪の印だとも言うようにソフトクリームを差し出し、首をかしげて男を見ていた。その姿には園も請け合いの愛嬌があった。

男は受け取ろうとして手を伸ばした。すると、着ぐるみはそれをさっとかわし、身を乗り出してソフトクリームを男の顔に押しつけてきた。目がつぶれて前が見えなくなった。男はカーブを曲がり損ね、壁に激突した。

夕方、そろそろ帰ろうとするとゲートのところにあの着ぐるみがいた。着ぐるみは帰っていく子供たち一人ひとりとハイタッチをしていた。みんな笑顔だった。男の番がきた。着ぐるみは同じようにハイタッチを求めてきた。男が応えようと手を上げると、着ぐるみはがら空きになった男の腹にえぐるようなアッパーを放った。

うずくまった男が起き上がると、すでにゲートは閉まっていた。着ぐるみも子供たちも園のスタッフも、もう誰もいなくなっていた。